

正午前の三十分間

上谷 三 秋 生

郵便が遅い、いつもよりは時間が経過して居るに、例の通路を偵察す可く坂路をたどつて先祖の墓地の丘にぞむ、自状するが僕等の村は總て百軒内外の細長き一小村だ、何れを見ても山又山其姿勢をいつげ恰も馬の脊を擬つて長く走れるもあり、摺鉢を倒にした丁度富士山を模した様の山もある、共に皆紅葉を以て思ひ／＼の晩秋の景を飾つて居る。

折しも一陳の風さつと袂を拂ふ膚に寒し。

遙かの往還には人影も稀、無論郵便の來想な影もなし、稍あつて眼は非常に疲勞を覺ゆ、空氣は透明にして風愈涼し遙かの山の端に霞靡いて居る、未だ郵便の影も見えぬ、外でもない僕は、『みづゑ』の到着を待つのみだ、他に何の慰安を求むる事を知らぬ身は、實際僕は『みづゑ』十一號時代からの熱心な間接讀者のつもりである。

思へば去んぬる六月まで大阪に住居し或る一商店の小僧を勤めて居たが、ふと腦を病み、清野博士のすゝめにより郷里に轉地靜養の身となつた。以來は大阪文徳堂書舗より『みづゑ』の回送を約して置いた、丁度、今日あたり其到着するの豫定故、實は斯く待つ次第さ。

一陳の強風寂を破つて、嶺の松並木を鳴らした、谿川の水はサラ／＼と音を立て、流れ、水車はギーカタンを無心に自然の音楽を奏して居る、向ひの家では、今年十六になるターチヤンが

寒む想な風をして洗濯をして居る、前の物干竿には着物が四枚ばかり翩々と飜つて、折しも鷄が一聲高くコケツコー。

一徑の往還を隔つて上の、エメラルドグリーンの大根畑に周圍され、中にしよんぼり草葺のさゝやかなる農家一軒、淺黄の手拭を被りし老婆の姿、其セピヤ色の壁、黒く肅然と前に峙立せる柿の巨木とのコントラスト、實に、一幅の活畫題、遙か彼方の田のほとりには、尋常小學校新築校舍作業中、其エルロイカーの棟日光に輝く、槌の音、山にこだましてカン／＼、下の坂道を鳥打帽を冠て咳拂しつ、通る男、谿流の堤を、遙かの彼方の山の端を左へ廻りて隠れつ。

未だ郵便は來らず、呆然と立ちし足は疲れて吾に歸る、トタンに、晩秋の冷風耳朶をかすめた、頭の中では只譯もなく『みづゑ』の内容を想像しつゝ、家路へと急いだ。(完)

寫生行(冬の十二社)

一月四日、朝寝をして十一時頃食事を終へた、氣がくさ／＼して頭がぼんやりしてる、東條君と松浦君が遊びに來た、何處かへスケツチに行かぬかと云はれて早速同意した、外へ出た、天氣はよい、市中は未だお正月めいて居る。

市ヶ谷から甲武電車によつて新宿で下車した、町外れへ出様と當てもなく行く、町とは云へ密接してゐるから物皆都めいてゐる、若い男女が往來で羽根を突いてさわいてる、後から聲かけ勇ましく初荷がやつて來る、綿屋の初荷だ、二三臺通り過ぎて

行つた、少し歩を早める、淨水場を左り三四丁行くと、左側に「十二社へ二町」と札がかゝつてゐるので、細い小路に入つて行く、こゝへ來るともう都らしくない、青麥の畑がある、茅屋が軒を並べて、鶏が長閑な聲を立てゝ居る、茅家か五六軒で盡きた、畑の中の細道をうれり行くと森が見える、森へ入ると十二社が。

落葉を踏むと其下に霜柱がぐさと崩れた、もう解けかかつて居る、本社の後から前に廻つて、下駄をぬぎ棄てゝ社殿に上つた、貧乏財布を探つて賽錢箱に投ずる、氣味のいゝ音がした、太い繩の附いてる鈴をガラン／＼と鳴して眞面目に額つく。

神殿の御洗鉢や冬椿

御手洗の厚き氷や今朝の春

仰き見る松や松子に春立ちぬ

神庭や落葉の中の霜柱

恍惚として我に返へると二人は居ない、今迄御手洗の厚氷をいぢつて居つた筈だと、四邊を見廻した、影も形も見えぬ、池の茶屋にはよもや這入るまいと思つたなれど、若しやと入口に行く、と、入らしやいと艶めかしい茶屋女、これはたまらぬと早速引返へして社の後へ廻つた、居らぬ、笹原があつて直ぐ下は崖だ、清らかな流が寒げに音立てゝ居る、霜柱の道を拾ひ歩きしながら、境内を通りぬげ様とあせる、一方は飲食店で一方は池だ、池には藍をたゝへて、枯葦が處々に背高く風にゆらいでる、飲食店の盡きる處に、女瀧と高札がかゝつて、男は入るべからず

とある、つまりぬ瀧だ、岡の下を二人の女が泥路になやみ乍ら歩いて來る。

霜解や足袋をあはれむ朝詣

女と行き違ひに岡に上つて行くと、二人は盛んにスケツチをやつてるので、我も道具を開いた、入らつしやいと面喰つた茶屋が池に倒映して頗る美しい、下書を取つてると、茶屋の屋根の上に梯子が現われた、間もなく人が登つた、はゝア消防の出初めだなと氣か付いた、一時間餘は無言の業、やつと十六切一枚寫生を終へて、冬木立の間を通り畑地へ出る、五六町にして橋がある、下を流れてる水は玉川の水だ、羽村から別れて來るのだ、川の兩側は一面に畑で、茶や桑の樹が所々に割據してゐる、畑中の一ツ家の前に夥しく大根が干し掛けてある、富士がよく見えて感じのいゝ畫題だ、枯草や枯枝を集めて路傍に焚火した再び三人適當の位置によつて寫生し始めた、左手の方から坊さんが二人きて前を通つた、八百屋が右手の細道を曲つて行た、東條君が出來たかと思に來る、松浦君も出來たとやつて來る、我れもどうかこうかごまかしたので、イザと焚火路を踏んで歸路についた。(孚明)

或る日

神奈川

加須美生

冬の暖かい日、反町裏の豐顯寺へ通する道より、右手へ少し下